

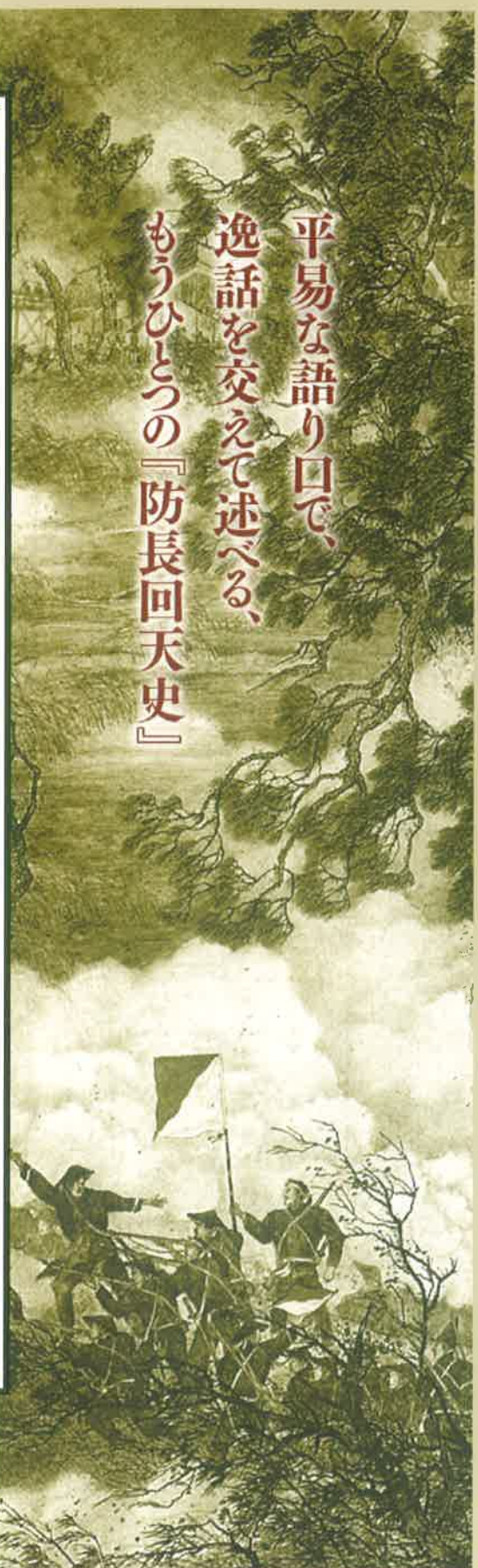
ました、其の時は切腹などは久しく打絶えて、珍らしい事ですから、新たに松本に役所を建てるとか、警衛の人数を出すとか、大層な事であつた相です、長井の宅は土原の山中町といふ所にあつて、其宅へは家老の國司信濃が檢使の頭で、目付など十何人と云ふ者を引連れて出張し、長井を呼び出して、罪状を讀み聞かせ、切腹仰付られると云ふを申し渡しました、長井は謹んで御受けをして、それから一應退つて、平服で出て来て、私が少し申置きたい事があると言ふて、自分が周旋をした次第を一々述べかけたさうです、スルと目付の糸賀外衛といふ人が……此の人は先年まで生きて居りまして、私が直接に聞いた話ですが、最早時刻が移りますから、言ふて置かるゝことがあれば、家族の方に言ひ置いて、最期を御急ぎになつたら宜からう、といふことを申したので、長井は非常に不平のやうであつたが、直ぐに退つて衣服を着換へ、所謂の白装束で、白装束といふても、是は長井の未亡人に聞たのですが、眞白といふものは何か憚るところがあつて、着ることが出来なかつたさうで、

内容見本
(65%縮小)

水色がゝつた白装束であつたさうです、袴なども同じ色の物を穿て出て來ましたが、其の介錯人は福原又四郎といふ人、此の人は後に又市と云ふて、昨年亡くなりましたが、其生前に私は、屢々逢つて其の話を聞いたことがありまして、長井の割腹の次第は能く分つて居ります、長井が親類預けとなつて、罪を待つて居る時、此の福原又四郎を招き、自分はどうも割腹を申付られるやうである、就ては、立派に腹を切つて死ななければならぬ、併し萬一最期に醜體でもあつては、武士の耻辱であるから、念の爲に介錯を貴様に頼んで置く、親類の中を見渡すに、介錯を頼むに足る者は貴様一人であると云ふて、刀を與へまして、シカン決して貴様の手は借らぬ、一人て立派に死んで見せるが、唯萬一の爲めであるから、其の含みて居る様にと申したさうです、其の當時福原は二十一歳か二歳でありましたらうが、なか／＼元氣な人でしたから、それを見込んで頼んだものと見えます、長井は白羽二重の坐布團の上に坐つて、其の側には介錯人の福原又四郎が控へ、前面には國司信濃以下がズラ

りと並んで居る、其の席の模様は立派に描いたものがありますが、長井は白木の三方の上に載せてある短刀を把り、弓八幡といふ謠曲を高らかに讀ふて、其の聲が琅々と屋外まで聞えたさうです、さうして靜かに腹を寛ろげ、スーッと一文字に切りました、餘り淺くはない、大分深く切つたものと見えまして、血が前の白い袴へザーッと流れた位であつたさうです、其れから短刀を逆手に持直し、咽喉へ當て、刎ねたまゝ、其の短刀を疊に突込んで、首を擡げて、ジーツと國司信濃以下の檢使の顔を睨み詰めて居る、長井自分は其の儘で死ぬる積りであつたらうが、血はドク／＼出るけれども、氣管を外れて居たと見えて、なか／＼呼吸が止まらぬ、介錯人の福原は長井が豫て吩咐けたのは此の時だと思つたから、自分の手を長井が短刀を持つて居る右の手に持ち添へて、再び咽喉へ突込ましてやらうとすると、長井は左の手を掉つた、其れは己れが一人て死ぬ、人手は借らぬと云ふ意を示したのである、けれども福原は無理に短刀を持つた手を上げさせて、咽喉の所へ當てがは

して、頸骨も切れよとばかり深く突込んだ、スルと長井は自分の左手で前へバツと刎ねたから、福原は後方から頭を押へて前へ伏せさせ、それで絶命したとふこととあります、實に立派な最期であつて、檢使の報告にも餘程立派に書いてあります、私其の以前他人の話を聞いたときは、最初咽喉を十分突き通して、左手で刎ねやうとしたが、手が頭へてやり兼ね居る様子を見て、福原が手を持添へて、刎ねさせたといふことでしたが、福原老人の話を聞くとさうではなく、今御話したやうな次第であつたさうです、それから京都の方の御話に戻りますが、忠正公が御歸りになつた後は、世子公が京都に御滞留になつて居たが、京都は攘夷論が益々盛んになつて、愈々攘夷を始めるに付ては、其の準備をしなければならぬといふので、正月の二十七日に東山の翠紅館で諸藩の尊攘黨が集まつて、會議を開いたことがある、それは肥後、土佐、水戸、津和野、對州といふやうな所の尊王攘夷に熱心な人々が集まつて、攘夷の事を評議するといふことで、長州の方からは中村九



平易な語り口で、
逸話を交えて述べる、
もうひとつの『防長回天史』

中原邦平〔著〕

訂正 補修 忠正公勤王事績

マツノ書店

伏見鳥羽戦 (松林桂月画)

幕末長州の一大絵巻



作家 秋山 香乃

忠正公とは、幕末の長州藩主・毛利敬親公のことだが、本書は公の事績というより、幕末の長州の軌跡であり、長州藩がこの動乱の大転換期に行われた政権交代の立役者である以上、一藩の範囲を超えて我が国の幕末史を活写している。一読した者は、思わず唸らずにはいられぬであろう。「これだけ複雑な歴史を、よくぞここまで簡潔にまとめ上げたものだ」と。

幕末の歴史は難解だ。政治、思想、経済、外交——それらは、藩、あるいは地位や身分といった各々の立場の数だけ百鬼夜行の如く入り乱れている。個々のイデオロギーも、急激に変わる社会情勢に振り回される形でふらふらと揺れ動く。あまつさえ、当時の人々の発する言葉、たとえば「攘夷」一つとっても、誰がいつ何を背景に発したかによって、その解釈は変わってくる。単純に夷狄を払うためだけの攘夷なのか、開国を未来に据えた攘夷なのか。

文久三年、五月一日を日限に日本は攘夷に踏み切る旨の詔が下った。これは長州の「御周旋」が実った結果だ。蓋を開けてみれば、当日攘夷を決行したのは、長州ただ一藩。幕府を筆頭に他藩は冷たく静観した。

無謀な攘夷を先駆けたかに見えた長州だが、しかし一方で同じ時期、藩士五名をひっそりと海外に出すことを決めていた。いわゆる「長州ファイブ」だ。

この辺の事情について『**聖忠正公勤王事績**』はいう。「他日必ず開国して、外国人と交際しなければならぬ結果になるのは極つて居るが、其時外国の事情を能く知った者が居らぬと、条約を結ぶに就ても、対等の条約を結ぶことは出来ぬ」から「洋行させよう」。

長州藩士の多くは幕府が先の外交で見せた国辱を雪ぐために列強に立ち向かおうとしていたにもかかわらず、一部の指導者たちは、いずれは開国せざるをえぬ国際情勢を把握し、開国のための攘夷を考えていたというわけだ。二重構造の攘夷である。こういうところが幕末史、ことに主役級の長州藩がわかりにくい一因だが、一事が万事、この調子だ。

ゆえに、幕末史を著わそうと思えば、自然、末松謙澄の『防長回天史』のように膨大な量の紙面を費やす以外なく、無理にまとめあげれば味気ない事実の列挙で終わるか、安易な図式化でお茶を濁すしかない。

本書は、全二十一回という講和速記の形をとっただけに、適度な枚数の中に実にわかりやすくそれぞれの事件へ至る経緯を説得力ある見解で述べ、なによりもふんだんな史料を背景にたくさんの逸話を添えて生き生きと表現している。そこでは、村田清風、吉田松陰、周布政之助、桂小五郎、久坂玄瑞、高杉晋作、吉田稔麿、寺島忠三郎、入江九一、時山直八等、お馴染みの

長州藩士が活躍し、その情景はありありと儼に浮かんでくる。息遣いさえ聞こえてきそうだ。

ことに政戦に敗れた長井雅楽切腹の場面は秀逸で、鳥肌が立つほど生々しい。血の匂いが紙面から沸きわたってくるのはもちろんのこと、滴り落ちる血液の濃度まで手に取るように伝わってくる描写もさることながら、長井当人の悲愴さとは裏腹に「久しく打絶えて、珍しいこと」となっていた切腹という行事に大騒ぎする周囲の慌ただしさが、実際はそんなものであったろうと、いつそうリアルに迫ってくる。

本書で瞠目すべきは、冒頭に書かれた毛利家の特異性であろう。元和元（一六一五）年家康が出した「公武法制応勅十八箇条」によって、武家と朝廷の付き合いは激しく制限された。幕府側から要請しない限り諸侯は一切金品の贈与をしてはならない、入京も駄目、請願、婚姻、すべては幕府の監視下である。そのため武家伝奏という役職が設置され、大きな権限を有していた。ところが、長州だけは特段で、元就以来の慣例により、「歳末歳首の献上物を為すのみならず、江戸往来の途中京都へ這入ることが出来」たのである。しかもそれらは武家伝奏を経ずに行われる。毛利家はこの特例により、皇別の末裔である特別な家柄であることに格段の誇りを覚え、この自覚こそが幕末騒擾の大転換期に長州が主役足りえた原動力となっていることを本書は示唆している。

この特異性ゆえに、安政五年に密勅が下り、朝廷工作において他藩に抜きんで、八・一八の政変による失脚ではもたえられないような焦りを覚え、暴挙とどこかで知りつつ、止むに止まれぬ激情に駆りたてられて禁門の変に突き進んでいったのだ。禁門の変で長州が逆賊として孤立しなければ、その後の歴史は存在しないだろう。

長州の幕末史を著わした書の代表といえ、やはり『防長回天史』につきる。全十二巻の読み応えは格別だが、その前にまずは本書で防長史に親しむのも楽しい時間となるだろう。



旧萩城 『防長志要』より



もう一つの防長回天史

中原邦平『忠正公勤王事績』の成立事情

作家 古川 薫

中原邦平が家史編纂を目的に設けられた毛利家の「編輯所」に入ったのは明治二十一年（一八八八）である。彼は嘉永五年（一八五二）、山口県大島郡に生まれた。加藤有隣、さらに東沢潟について漢学を、また宣教師ニコライからロシア語をまなんだ。外国語学校を出て、参謀本部御用掛などをつとめ、ロシア語の翻訳にあたった。毛利家の編輯所にまねかれたのは、元勳井上馨の推挙であろうといわれている。

末松謙澄（ノリズミ、普通ケンチョウと呼ぶ）が、毛利家から編輯所総裁を委嘱されたのは、明治三十年（一八九七）だった。謙澄を推したのは、元勳伊藤博文である。その人選について問題はあったが、ケンブリッジ大学に留学、近代史学に明るいこの人物をおいて他にもとむべくもなかったのだ。

謙澄は伊藤博文の娘婿である。豊前小倉藩の出身ということで異論が出た。かつて長州藩に敵対した藩にゆかりのある者に毛利家の歴史を書かせるのかと、山口県内で反対の声が上がった。

謙澄は総裁に就任すると、中原邦平一人をおいて、山口県人約二十人で構成されていた編輯所職員をすべて解任した。そして山路愛山ら当時中央で活躍していた文筆家四人を採用した。いずれも「他藩人」である。遅れて堺利彦も加わり、謙澄を中心に七人が編輯員となって執筆を開始した。七人といっても、中原邦平は実際の執筆陣から除外された。

謙澄は藩主敬親の功績をたどる家史ではなく、長州藩史を編むという意気込みだった。ところが「維新の功績を誇示する毛利家史ではないか」と「社会新報」が『防長回天史』編纂の批判記事をかかげた。いわばそれを奇貨として、毛利家は内外から物議をかもす『防長回天史』の編纂を中止してしまった。

謙澄はそれから自力で編著をつづけ、「未定稿」から初版本を経て『訂修防長回天史』十二巻が、自費により出版されたのは、大正十年（一九二二）だが、大著の完成を見ずに末松謙澄はその前年病死している。

一方、防長史談会から、中原邦平著『訂正補修忠正公勤王事績』（忠正公は毛利敬親の法名）が刊行されたのは、明治四十四年五月であった。毛利家の『防長回天史』編纂中止が決まった一カ月前、それが出たということに、微妙な事情があらわれている。

かいつまんで言うと、山口県人有志が、中原邦平を講師として、長州藩の維新史を聴く会をひらいた。それは前後二十一回にわたる長講で、本格的な取り組みであった。つまりは「他藩人」末松謙澄による『防長回天史』編纂と同時期、それに対抗するくわだてであったことは間違いない。

その速記録はゆうに一冊となる分量で、ただちに『忠正公勤王事績』として出版のはこびとなる。邦平が「寺内（正毅）閣下が予の講話速記を活刷して同好の士に頒たれたり」と「再版趣旨」に書いているように、寺内陸軍大臣の発起で印刷されたのを、のち防長史談会が復刻、『訂正補修忠正公勤王事績』として世に出した。

その部数はわずかなものだったろう。昭和四十九年九月、防長史料出版社が限定五百部で復刻したが、なお入手を希望する人が絶えなかったのは、中原邦平による叙述の内容のユニークさによるのだろうと思われる。

第一に約一千ページにまとめられたこの防長維新史が、通読できることである。原史料などを網羅した『防長回天史』十二巻となると、和漢混淆文を読み下すだけでも、一般人の寄りつけない資

それにくらべると、『忠正公勤王事績』は講演の速記だから、口語文であり、明解で親しみやすい。エピソードもふんだんに紹介されている。

「それには刀が要るが、刀がないから、一つ下され、麻田はヨシやろうと言ふて、奥へ這入つたが、躰て一本の大刀を持出し、之をやらうと言ふて、抛り出した。高杉はそれを手に取つて見ると、金具に一三つの御紋が付てゐる(略)麻田はさうかと言ふて、手子を呼んで鑓を持つてこいと言いつけ、御紋のところをゴシゴシ削り消して―」

京都で高杉晋作が將軍を殺すと騒いだときの話である。むろん『防長回天史』では見られない記述である。

維新開始期とされる天保の改革から説き起こし、版籍奉還にいたる敬親の生涯を語る邦平の『忠正公勤王事績』は、まさに防長維新史そのものである。平易な語り口で歴史情況と、敬親を中心とするおびただしい登場人物を、逸話もまじえて述べる彼の維新史は、史料収集を担当したときから蓄えられた詳細な知識によつて、史実はしつかり押さえられている。それが「もう一つの『防長回天史』」とされるのは、的確な評価といふべきだろう。

■本書は、数多くある「防長幕末維新史」の中でもまとまりの良さややすさにおいて抜群。長州びいきにはもちろん、その逆の立場のお方にも、自信を持つてぜひ一読をお奨めできる古典的名著です。

歴史学者であると同時に名作家としてもよく知られるこの著者には、小社が復刻しただけでなく『井上伯傳』『伊藤公實録』『長井雅楽詳傳』など史実に基づく名著が沢山あります。

■小社では来年『防長回天史』の廉価版を予定しています。■古川薫氏も書いておられる通り、かつて下関で旗揚げした防長史料出版社の処女出版が本書でした。すぐに売り切れ、再版したとも聞いております。

■体 裁 A5判上製箱入 八八〇頁
■定 価 一万五千元(税・〒込)
■特 価 一万二千元(税・〒込)
■発 売 平成二十年三月中旬予定
■限定三百部 (番号入)
▼書店不卸 ▼分割払可 ▼返本OK
山口県周南市銀座2-13
☎〇八三四②二九五 マツノ書店

ります、其の時の口上には、どうか豫て好き機会に御目に懸つて、國家の事も論じたいと思ふが、此度は一應懇意を通ずる願しに之を差上げると云ふやうなことでありました、此の大日本史は今日まで周布公平君の所にあるさうです、又其後桂が言ふのに、どうか水戸の方の有力の人から長井に手紙をやつて貰ひたい、それには誰が宜からうか、武田耕雲齋が宜からう、武田と長井とを會見させたいものであると、西丸岩間に相談すると、兩人も無論同意であったが、丁度其の年の八月に烈公が病氣危篤と云ふことで、中納言慶篤公が國へ御歸りになりました、岩間も其の御供で國へ歸ることゝなつた、ソコデ岩間は武田耕雲齋に逢ひ、長井に一つ手紙をやつて呉れぬかと話込んだところが、武田は幕府から嫌疑を受けて居る身分のことであるから、今どうも其の様な事は出来ぬ、且つ、長州人などは案外當てにはならぬ、桂小五郎には嘗て齋藤彌九郎の塾で逢ふては居るが、今の様な輕卒の事は出来ぬ、況して自分も謹慎中の身分であるから、と云ふやうなことで、どうしても折合つ

内容見本 (65%縮小)

久阪は軍さをする氣はなかつたのか、直ぐ號令を發して路を曲げ、鷹司家の裏門から邸内に繰込んで仕舞つた、其の時鷹司公は今御參内と云ふので、裝束で居られたから、久阪は其の御裾へ縋つて、吾々は歎願の筋あつて參りました者でございます、御參内になるならば、ドウか御供を願ひたいと云ふて泣て願ひますと、さう云ふ事は出来ぬと言ふて、鷹司公は振り切つて、御參内に爲つたと云ふことであります、此の時はモウ仲立賣御門の方も、哈御門の方も破れた後であるから、其處等の兵がズツと堺町御門の方へ皆集つて、鷹司公の邸を包圍して仕舞つた、是は戦ひと云ふ程の事は無い、先づ喧嘩を見たやうなことで、時々鷹司家の御門を開いて、長州兵が押し出して鐵砲を撃ち、又は斬り合ひをしては、又這入つて門を締めると云ふやうな風で、別に花しき戦ひはなかつた、久阪が門外へ押し出した時股を撃たれましたが、其の傷は重かつたとも輕かつたとも言つて、聞く人毎に一致しませぬが、何しても手拭で捲いて、指揮して居つたと云ふことでありますから、ヒドい怪我

狼狽へて同志打が多かつたさうで、自分の先陣が崩れて來たから、先陣に向つてドン／＼撃つたと云ふことであります、其れから國司信濃の兵は仲立賣御門を這入つて、勤修寺家の裏門から進んで、筑前の兵を撃ち破り、二番手の會津兵に懸つた、此の時は時刻が遅れて、哈御門守衛の兵杯が援兵に來て、それが爲めに遂に撃破られて、散り／＼に爲つて敗走致しました、

山崎の方はドウかと云ふに、是の一手が一番遅かつた、三方から進むのに、時刻が一致せぬから、それが爲めに不利益が多かつた様にも思はれます、此の一手は夜の十二時頃山崎を發しましたが、其の道筋は矢張り分りませぬ、此の手に加つた黒岩直方君杯に聞いたこともありましたが、其の頃は京都の地理を知らぬものであるから、何處を通つたか一向分らぬ、但し桂川で朝飯の兵糧を使ったのは善く覺えて居る、多分東寺邊から這入つた様に考へると言はれた、其れから京都の町に入ると、ドン／＼鐵砲の音がするから、久阪が何んでも急げと言ふて、堺町御門に向ふと、越前の兵が十分に固めて居る、

ではなかつたらうと思はれます、それから愈々勝利がないと見切つて、引揚げる段になると、久阪は御兩殿様に對して申譯がないから、寺島忠三郎と共に割腹して相果てると決心しましたが、今若殿様が御上京の御途中であるから、此の次第を御注進する者が無いといかぬと云ふので、入江九一を呼んで我々は如何にも相濟まぬ事をした、今若殿様が御上りの途中であるから、京都の次第を御注進申上げて、御留め申す様に、吾々は割腹して申譯をすると言ふと、入江は己れも死ぬると言ひましたが、其れでは後事を託する人がないと云ふて、久阪が留めましたので、入江は鷹司の穴門から出て、落ち延びると云ふ積りであつた、其の時は非常な混雑で、小さな道に人數がユタ／＼して居る、其れを押し分けて、入江が外に出ると、槍で以て顔を突かれ、目玉が飛び出して死んで仕舞つた、さうして久阪と寺島は鷹司殿の御局口で割腹して死んださうです、此の事に付ては鷹司の中小姓で、兼田義和と云ふ人が久阪の遺骨を収めたと言ふことを、京都府で聞いたことがありますから、兼田